

構想がまとまらなかった、見えないの
で絵にしくい、など、約二〇パーセ
ントの生徒は、イメージを描くことの
困難さを訴えてはいるが、この学習へ
の興味は予想より高かったと思う。

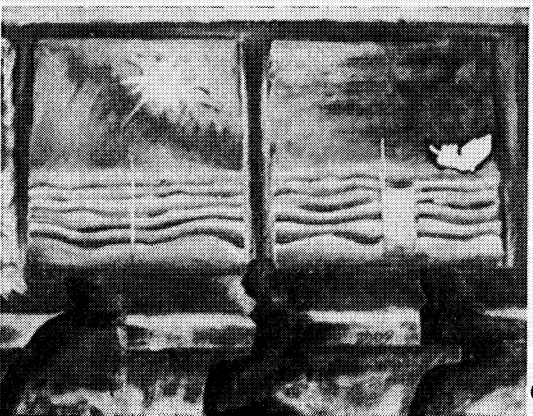
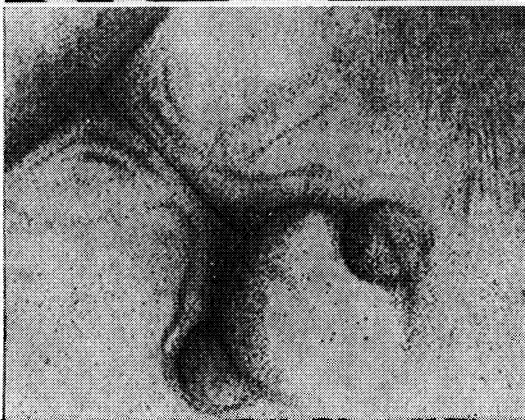
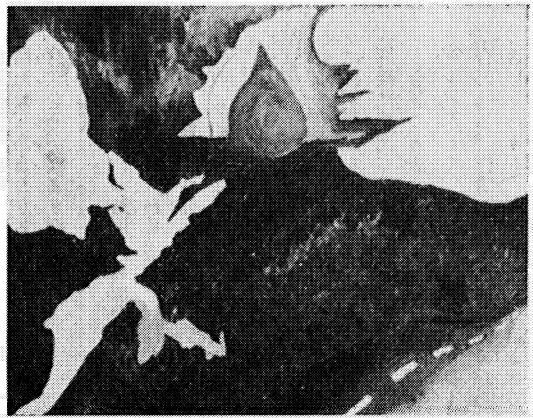
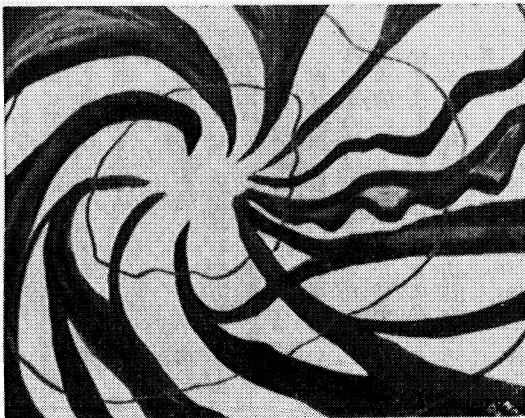
また、技法的な点についての感想で
は、どちらも、拘束がなくのびのび描
けたというものより、思った通り描け
ずに苦労したという回答が多く、それ
だけに、生徒たちの学習への取り組み
が単なる遊びとはならず、成功したよ
うに思う。

ともかく、この学習の進行につれて
はじめあったとまどいが薄れ、イメ
ジが内面的な深まりを持つとともに、
表現も豊かさを増したことは確かであ
る。

題を、「風」「雨」「雪」など、形
象の不確かなものとした理由は、構想
を、想像や空想という面だけではな
く、より観念的な世界への広がりも期
待し、表現の仕方として、抽象表現に
も結びつき易いものをとる考えにと
どまり、単なる風景に終わったものも
居て、どのような題や手だてが適す
かは、更に研究の要がある。

作品について

表現の傾向は、象徴的なもの、
具象的なもの、抽象的なもの、シ
ュールのなものという順に大別で
きる。次にその作品を例示する。



写真説明

①「光」暗やみを輝する光、道がかな
たに伸びて行く―象徴的な表現―

②「風」砂嵐の中をかける馬。たくま
しい力動感の表現―具象的な表現―

③「風と光」空間をよぎる白い蝶、下
方の黒いかげは、消え去った人の残像
―シュールの表現―

④「風」天空から吹きおろす―爽快な
風のイメージ―抽象的表現―

⑤「雨」ミクロの世界（F10のキャン
パスに鉛筆で点を打ち、次第に形を構成
した）―錯画からの表現―